

SESSION 2010

**AGREGATION
CONCOURS EXTERNE**

**Section : LANGUES VIVANTES ÉTRANGÈRES
LANGUE ET CULTURE JAPONAISES**

VERSION SUIVIE D'UN COMMENTAIRE GRAMMATICAL

Durée : 6 heures

Documents autorisés : Dictionnaire Kôji-en, Iwanami, 1983, et rééditions; Dictionnaire Taishûkan kango shinjiten, Taishûkan, 2001, et rééditions.

L'usage de tout ouvrage de référence, de tout autre dictionnaire et de tout matériel électronique est rigoureusement interdit.

Dans le cas où un(e) candidat(e) repère ce qui lui semble être une erreur d'énoncé, il (elle) le signale très lisiblement sur sa copie, propose la correction et poursuit l'épreuve en conséquence.

De même, si cela vous conduit à formuler une ou plusieurs hypothèses, il vous est demandé de la (ou les) mentionner explicitement.

NB : Hormis l'en-tête détachable, la copie que vous rendrez ne devra, conformément au principe d'anonymat, comporter aucun signe distinctif, tel que nom, signature, origine, etc. Si le travail qui vous est demandé comporte notamment la rédaction d'un projet ou d'une note, vous devrez impérativement vous abstenir de signer ou de l'identifier.

Tournez la page S.V.P.

1) Traduire en français le texte joint :

増田みず子「女というものは……」1986年。

2) Étudier dans ce texte les différents emplois de こと.

女というものは……

増^増田みず子

子供の頃私は自分が女の子であることを自覚していなかった。あるいは女の子である筈はないと思いきもうとしていた。小学校の三、四年になってようやく「ひょっとしたら大きくなっても男になれないのではないか」と不安が生じた。胸が膨らみ始めると「このままでは女になってしまう」と絶望めいた思いに襲われた。それより前、大人が戯れ半分に子供に向けてよく口にする「大きくなったら何になる?」という言葉に対して私は「男の人」と無邪気に張り切って答えたものだ。「誰の花嫁さんになる?」(これは今考えてみても、大人が子供に浴びせる多くの無神経な質問のうちでも、たちの悪い愚鈍な質問である。お父さんとお母さんとどっちが好きかという質問の醜さに匹敵する) に対しては答えようがなかった。将来私が男になれば全く無意味な言葉と化してしまうからである。そして等しなみに花嫁になるしかない女の子を、私は子供心にも哀れんだ。

私は男女の性別の選択権が自分がないなどは、とても信じられなかったのだ。周囲の女の子たちのうち、泣き虫でぐずの子だけが、将来も女のままでおり、女の子みたく男の子も将来女になるのだと、どうやら私は本気で信じていたらしい。それも小学校高学年に到るまで。

私は腕っぷしの強さが誇らしかったし、最大の望みはさらにげんかに強くなることだった。

したがって中学への進学時、スカートの制服をあてがわれたのが、私の最初の挫折体験になる。女子はスポンをはくことを許されなかった。その不満を誰彼となく訴えて、変な子だ、と一笑に付されてから私の精神放浪が始まった気がする(ついでながら私の基本的な不信感も同時に培われた。男にふさわしい性格と力量を持ち合せている私を神——自然——はうっかり女にしてしまった。神はそそっかしく、万能ではない、と。中学生になってから急にしかも強制的に女に組み入れられたので、いろいろ日常的にも不便なことが多かった。男子は「女とまともなげんか出来るかよ」とこともなげに言い、女子とは話も行動の趣味も合わなかった。私は無口になり孤独に陥った。

ところでなぜ私がそんな変な女の子だったかと言えば理由はごく簡単なのである。もっともそれに気づいたのはつい一、二年前だ。男女のことになると、私は信じられないくらいにものわかりが悪い。

私には二歳上の兄がいる。両親が兄に対して精一杯施した(男の子への)教育としつけを、幼ない私までが律義に受けとめてしまったに違いない。私は今でも納得しないうちは体が動かないし、いったん納得するとそれが体の一部になってしまうようなところがある。当時の私にその頑固な性格が芽生えていて、さらに男の子用教育が性に合っていたのだと思うほかはない(女の子用教育は教育というより飼育及び調教としか思えない)。私は男の子が持つべき価値基準を身につけたことになる。今でも服を新調の折などに、「これは女の色だから恥ずかしくて着られない」と拒んだ、男の子だった頃の目安が俄然頭をもたげてくることが多い。

さて中学高校で手当たり次第の乱読に耽った私は、またもや本の世界の中で、男女の区分けについて頭を悩ませるはめになった。歴史、文学、哲学、宗教。いずれの分野でも、私ははじめ読むたびに眼からろろこが落ちる思いで夢中になれた。自分が著者や登場人物と非常によく似た考えを持っていると思われたからである。だが私がいきいきと眼を輝かせたのは登場人物が男だけのうちであった。そこに女が登場するやいなや、様相は一変する。極端に美化されるか、不当に貶め^{きざし}てあるか、のどちらかで、読みながら私は「嘘^{うそ}ばかり」と思い、作者たちはその本を本物の女たちが読むことを考慮に入れていないのかと疑った。他の部分が素晴らしいだけにその粗雑さと歪曲の合点がゆかなかった。

では私がそれまで何十回も頷いて共鳴し感激したものは一体何だったのか。かほどの明哲で緻密な作者が、女を論じる時に限ってなぜ故意のように視力と頭脳を鈍らせるのだから？。それとも私自身が何か重大な読み違いをしているのだからか？

私は作者たちの性格と男女観を初めて知ることになる。好んで読んだ論理性のある本は例外なく男たちの手で書かれ、女を書く段になると現実離れ（と当時は思った）した非論理的な筆になる。私は、かつて男の子たちがけんかで不利になると決まって言い出した「女のくせに云々」と、作中の「女というものは云々」が妙に響き合うのを感じた。老若愚賢の男たちが声を揃えて、私の腕に、女と大書したぐにやぐにやと変形自在の色鮮やかな重い物質を力ずくで抱かせた気がした。しかしだからといって私は一足跳びに「女の生き方」「女の幸福」について考えこむわけにはいかないではないか……。私はそこまで短絡的な人間ではない。

あれから二十年たつ。私は小説を書くようになった。作家になるつもりだったがいつのまにか女流作家ということになっている。私の主人公たちは二十年前の私と同様「女」をためつすがめつ、実在感をつかみあぐねて、塗方に暮れたままのようだ。